

17) ドクター・アイゼンバルトは名医だったのか？

Was doctor Eisenbart a great doctor?

鶴見大学 別部 智司
三浦 一恵
山崎ひろ子
戸出 一郎

Satoshi Beppu, Kazue Miura, Hiroko Yamazaki
and Ichirou Tode, *Tsurumi University*

ドイツでは藪医者として語り継がれて来た Dr. アイゼンバルトは実在した医者である。本演題は鶴見大学図書館所蔵のリトグラフをきっかけに調査したところ若干の知見を得た。

鶴見大学所蔵のリトグラフは“Dr. Eisenbart und sein Patient”で J. Schneider 1826 年作（ドイツ）、彩色リトグラフ 2 葉 36.8×21.9 cm である。絵は着飾った Dr. アイゼンバルトが、ポケットに注射器や不気味な薬びんを押し込み、大きな鉗子で抜いた歯をかかげている。一方の患者は腫れ上がった頬に湿布をして、痛みと恐怖に耐えている。はたしてこの患者の運命は如何に？ と言うような、当時の医師と患者の世相を滑稽に物語っている。

本名 Johann Andreas Eisenbarth は 1663 年 3 月 27 日から 1727 年 11 月 11 日まで生存して Erfurt や Magdeburg など長い諸国遍歴の途上 Hann. Münden にいる時に病に倒れ、静かに生涯を閉じた。Dr. アイゼンバルトとは、「鉄髭博士」の異名で日本にも伝わっている。藪医者、いかさま師と言われたが、彼の手術技術は、現代医学にも通用する高度なものであったことが証明されている。

Dr. アイゼンバルトは逸話も多いが、現在に至っても市民から特に親しまれている。Hann. Münden では晩年に過ごした家の外側壁に、彼の人が飾ってある。木組みの美しい家の正面、二階の窓と窓の間に大きな注射器を抱え足下に大きな薬瓶を置いた Dr. アイゼンバルトの人物が昂然と立っている。また、旧市庁舎に彼のからくり時計があり、定時になると患者が Dr. アイゼンバルトに歯を抜かれるシーンが演じられながら、時が

告げられる。現在では、Hann. Münden において彼の野外劇が夏に行われている。また、出身地の Oberviechtach では、誕生日の 3 月 27 日に Dr. アイゼンバルトにちなんだ祭りが開催されている。音楽では 1952 年にオーストリアの作曲家ドスタル・ニコがオペレッタを作曲、ドイツリートにも“Doktor Eisenbart”があり、歌い継がれている。ドイツリートは歌詞が患者を滑稽かつサディスティックに扱う内容で、意気軒昂たるリフレインで終わっている。歌詞の内容がやや常軌から外れているものであった為、19 世紀に Dr. アイゼンバルトの墓が発見されるまでは架空の藪医者となっていた。しかし、Dr. アイゼンバルトは研究熱心、誠実な医者で、優れた歯科、外科かつ眼科医であり、プロシアの宮廷医師の名誉も授けられている。

当時としては革新的な医術が、同業者のみならず、社会的にも注目を集めて、批判やからかいの種として、面白おかしく誇張されて、特異な人物像となったものと示唆された。

18) 『方伎雑誌』にみる歯科的事項

Studies on the Hōgizashi and Dentistry

医の博物館 西巻 明彦
日本歯科大学 屋代 正幸

Akihiko Nishimaki, *Museum of Medicine and Dentistry*
Masayuki Yashiro, *Nippon Dental University*

『方伎雑誌』の著者、尾台榕堂（1799～1870）は、現在の新潟県十日町の出身で、天保 5 年（1834）師である尾台浅嶽の死後尾台家を継いでいる。『方伎雑誌』は、最晩年の書で、死の 1 年後明治 4 年（1871）に出版されている。尾台榕堂は、当時浅田宗伯とならぶ流行医であったという。『方伎雑誌』の意図するところは、「医術ノ要ハ、方意ヲ得ルニアリ。方意ヲ得ルハ、薬能ヲ詳ニスルニアリ。但一味ノ能アリ。一方ノ効アリ。故ニ唯薬能ノミニ就テハ、方意ノ解セザルモ有レドモ、先ヅ薬能ヲ知ル時ハ、方ノ運用変通、自由自在ヲ得テ、方ヲ使フコト、恰モ猿舞シノ猿ヲ使フガ如シ。」と述べ、方意と薬能の重要性を主張している。

『方伎雑誌』にみられる歯科的事項は、79「紀州

藩、筒井八十之丞ノ新婦。鉄漿ヲ附ケントスルニ、俄ニ咽中へ物ノ閉ヂ塞リタル様也。其時別ニ病人アリテ、余其ノ家ニ住キケレバ、新婦急ニ診ヲ乞フ、之ヲ眎ルニ、咽中ニハ仔細ナシ、但会壓ガ長大ニナリテ下リ、先キハ咽ノ下ニ附著シ、色ハ紫也。新婦云フ、痛ハセザレドモ、咽ガーパイニ塞リタル心地也ト。余測瘡子ニテ、探リ見ルニ、長大ニハナリタレドモ、マダ焮腫セズ、柔カニテグニヤグニヤトシテ、前後左右ヘ動キ、ナカナカ針ハ施シニクキアリサマ也。然レドモ其形ノ長大ト色トヲ見テハ、血ヲ取ルヨリ捷徑ノ術ハナシ。余、新婦ニ対シ、若シ日後咽喉会壓トモ、痛ヲ発シ、飲食ノ通ゼヌニ至ラバ、ユコシキ大事也ト、説キ聞カセケレドモ、針ヲ懼レテ肯ゼズ。余、百方説論シテ、鋭利ノ喉痺針ニテ適宜ニ刺シケレバ、紫血淋漓トシテ出ヅ、瀉心加石膏湯ヲ六貼与ヘ、水礪散ヲ度々吹キコマシム、但六貼ノ薬ト一針ニテ、サラリト治シケレバ、病家ニテハ妙也トテ嗟歎セリ。蓋初起神速ニ治ヲ施シタル故也。是ハ万病トモ同一理也。」と記している。榕堂は、本道の医師であるが、外科の医術をこころえていたことは特徴的である。今日、本来的な口中医は、どのような治術を行ったか明確でない点もあるが、この治験例はその一端を示す上で貴重である。測瘡子とは、今日で言うゾンデであり、またカテーテルの記載も『方伎雑誌』にあることから、漢方医の間でも普及していることがわかる。さらに榕堂は、針灸の施術も行っており、きわめて有能な医師である。瀉心加石膏湯とは、三黄瀉心湯に石膏を加えた処方であり、投与した理由は記載がないが、瘡毒を内消させるには、三黄瀉心湯は有効であり、石膏は腫れの基本方剤であったためと思われる。瀉心加石膏湯を投与したことから考えて、脈は数脈であり、また石膏を投与する方意として煩渴があることから、口蓋垂の炎症を煩渴ととらえたためと思われる。現代歯科医学的に解釈するならば、切開排膿を行い、抗炎症剤を投与したことになる。

また、71に「麾下伊丹氏ノ室、年二十、喉痺ヲ患フ、惡寒發熱、肩背強急シテ、声出デズ、先葛根加桔梗湯ニテ、十分ニ發汗シ、繼イデ桔梗湯ニ、瀉心湯ヲ含シ、日日五六貼ヅ、用ヒ、血ヲ度々取リタリ、然レドモ炎暑ノ時節、殊ニ熱勢甚ダシケレバ、胸膜ノ熱焰蒸騰シテ、咽中糜爛次第ニ

広ガリタリ、因テ黄連解毒湯ニ、石膏ヲ多ク加ヘ用ヒ、日日五六度ヅツ冰礪散ヲ、咽中ヘ吹キタレドモ、更ニ効ナシ、口中科モ診シタレドモ、咽中ノ体ヲ視テ、胆ヲ落シテ、帰ルノミ、病人ハ薬ヲ勉強シテ、一貼ヲニ二三度ニ飲メドモ、米飲炊湯ノ類ハ、少シモ用イル事カナハズ、炎熱中苦痛シ、不食不眠故、大イニ弱リ、十二、三日ニテタオレタリ、余ハ喉痺、喉癰、纏喉風、咽喉結毒等ヲ療スルコト、数十人、不治ノ病人モアリタレドモ、カホドニ精氣ノ早ク脱シタルハナシ、嫩脆ノ質トハ云ヒナガラ、遺憾ト云フベシ。」と記している。ここで口中科の守備範囲であるが、口中とは現在で言う口腔だけではなく、咽喉も含む点である。この条文は、口中科医が明らかに咽喉をも治療することを示した治験例であり、重要と思われる。

榕堂は、この他にも舌炎などの治験例を記載している。当時の口中の施術は、切開を行うこと、清熱剤の投与を行うこと、冰礪散などの吹薬を吹きつけることが、主要な施術であったと考えられる。19世紀中頃、榕堂の治療術が世界的にみて、時代遅れであったのかどうかは判然としない面もあるが、痘瘡の治療において『方伎雑誌』の中で、治療方法さえ誤まらなければ、難しい疾患でないと述べていること、さらに、ヘボンにことわられた患者を、茯苓飲加半夏で治癒させたことが記されている。同時代の浅田宗伯が、フランス大使館の病人を救ったことにより、ナポレオン3世から表彰状を送られたことを考えるならば、抗菌剤、抗炎症剤のない当時、榕堂らの治療は、世界的にみて有効な方法と考えることができる。

19) 「聖濟総録」から「万安方」へ—梶原性全の偉業—

What Seizen Kajiwara contributed using
“Seizaisoroku” and “Mananpou”

鶴見大学歯学部歯科麻酔学講座 三浦 一恵
戸出 一郎
深山 治久

Kazue Miura, Ichiro Tode and Haruhisa
Fukayama, Department of dental anesthesiology
Tsurumi University School of Dental Medicine